

第1章 学級経営よもやま話

第8節 教育は熱伝導

今回は、私の教員生活の中でもっともしんどかった1年の最後の10日間を紹介します。

■教育は熱伝導■

1 はじめに

「教育は技術で教えるものではない、熱で伝えるものだ」というのが、私の持論だ。教育技術を否定するつもりはない。しかし、技術云々の前に、熱のない教師は子どもの前に立つべきでないと思う。

そもそも、若い教師はなぜ子どもに人気(チヤホヤされるという意味ではない)があるのだろうか。教育技術なら、一般的にベテランの方が持っている。じゃあ、若いから？

若い教師とおしなべて言うが、若い教師の間にも人気度はいろいろある。時には、若い教師以上に人気のあるベテラン教師だっている。なぜだ？

私の見立てでは、子どもに伝わる熱(子どもに向き合う熱意と言ってもいい、あるいは子どもとの距離感と言ってもいい)の問題だと考えられる。このごろの若い教師にあまり熱を感じられないのが気がかりだ。

何にこそ目を向け、語っているのか

「教育雑記帳」No. 19(1986.5.14)より

教育というのは熱伝導だとつくづく思うのです。たしかに授業をうまくやることも大事なのですが、常日ごろ、子どもの前で何を語り、何に怒り、何を大事にしているかということが、少しずつ子どもの中にしみ通っていくように思えます。それは朝の会や帰りの会の場であったり、授業中の余談であったりするのですが。ぼくにとって欠くことのできないのは、反戦、反差別の視点かな。

オーとよびかけているのか

「教育雑記帳」No. 20(1986.5.15)より
きのう配達された『解放教育』6月号の「編集後記」に中村拓三氏(解放教育
研究所事務局長…「にんげん」を出しているところ)が次のように書いています。

▶ 春——4月。新卒の先生が初めて教壇に立つ季節だ。新卒といわないまでも、まだ五里霧中の教師もいるだろう。若いというのはいいことだ。何かをつかもうと必死だろうが、肝心カナメの部分がわからないと、若いままで年ばかりをとる。それは何か。子どもそれぞれは核みたいなのをいただいている。話しこむことだ。何べんでもいい。なんとかしてさぐること。その1つでいい。そこから、すべてが見えるのだ。

▶ 若い教師への質問もある。実践記録がダラダラと長いばかり。キメ手がない。こんな実践では、子どもたちがへばってしまう。たよりないのだ。オーというばウン。オーとよびかけているのか。オーに力がこもっていないのか。まちがってもいい。全力で格闘できないものなのか。

中村さん独特の少々雑で歯切れのよすぎる文章ですが、言おうとされているな
かみ、己の心に問い返したいですね。全力で格闘したいですね。それをお互いに
応援できるなかまでありたいですね。守りきれぬなかまでありたいですね。本当
に、そう思うのです。

2 「日刊6の1」の子どもたち

1985年度というのは教師になって8年目で、3度目の6年担任だった。振り返ると、私の教職人生で最大の挫折を味わった年である。

この年は、「れんだこ」というタイトルの学級通信を発行していた。6月11日発行の17号を最後に、「れんだこ」は絶版を余儀なくされた。ある件をめぐる2人の保護者と対立したのが原因で、その責任の半分は私にある。大半の児童や保護者にはナニかあったことさえ知られていなかったが、私のココロは深い靄の中を彷徨った。鉛の塊を胸に沈め、1年を過ごすことになってしまった。

子どもたちとの関係だけはなんとか保っていたが、本気で子どもとぶつかつてはいなかった。こうして、卒業まで10日という地点に立った。

「じっさま……ばんざい、やっつけられ」
 つて、たのみに、はしつたもんだ。
 しかし、じっさまの、三人のせがれは、のこらず、戦死していた。
 うえの一人は、中国大陸で、あたまのよかつたのを、じっさまもじまんしてた、すえのせがれも、沖繩で、ぜんぶ、死んじまったのさ。
 去年の冬に、ばっさままで、なくしちまつて、とうとう、ひとりぼっちになると、めつきり、元気がぬけて、炭やきのしことを、やめにして、うらの、じゃがいも畑の守りをして、しょんぼり、くらししてた。
 それでも、天子さまにさしあげる、じゃがいもを、山うさぎに、くわれちゃんねと、ながい竹



③ 月のない、むしあつい晩だった。
 万造じっさまは、うらのじゃがいも畑に、へたつと、うつぶせになつて、あやしい人かげを、みつけた！
 しかし、朝になつても、中国人は、だれひとり、やっつてこなかった。
 それもそのはず、ろくろく、くいももくわずに、現場監督に、なぐられたり、けられたりしてはたらかされてた中国人たちは、鉄条網をやぶつて、にげだしても、鉦山のうらの、がけ道をのぼりきることができず、その夜のうちに、憲兵や、警官に、あらかた、つかまっちゃつたんだ。
 それでも、しぶとく、山おくににげこんだ、中国人たちを、つかまえるために、村じゅう総出で、山狩りが、はじまつた。
 やぶかげに、かくれていた中国人を、三人も、竹やりで、つきさした男も、いた。
 生けどりにされた、年よりの中国人は、たわらみたく、ぐるぐるまきまきされて、村役場のまえに、さらしもんにされ、かんかんでりの、夏の日をあびながら、石ころでうたれて、血だらけになつた。
 学校の先生に、引率されて、「チャンコロ」見物に、やつてきた、村のわらしどもが、きょうそうで、石ころを、ぶつつけたんだ。
 「チャンコロ！ 人ころしい！」——つて、わめきながら……。

さねとうあきら・文
 井上洋介・絵

① ——これは、このまえの戦争も、そろそろ、おわりかけた、一九四五年六月のはなしだ。

四郎五郎谷の、万造じっさまは、ばんざいじっさまつて、よばれていた——。
 この村から、出征兵士がでると、万造じっさまは、つえをつきつき、行列の先頭をあるき、峠を二つこして、町の停車場につくと、まっかな、たすきをかけた、出征兵士に、
 「ばんざーい！ ばんざーい！」
 と、よばつてやるんだ。

いつもは、ちんちくりんの、こしまがりじっさまも、この時ばかりは、しゃきつと、からだのびて、仁王さまみたいに、でっかく、みえた。
 日露戦争の、勇士だったという、万造じっさまの、ばんざいにおくられると、じぶんのお父や、せがれが、ぶじに、もどつてくるみたいな気がして、出征の赤紙をみようもんなら、村のもんは、きょうそうで、

さお、かついで、木のきりかぶに、つくねんと、こしかけて、日がな一日、うさぎの番を、してたつけ——。

② ——うおーん、うおーん……！
 わすれもしない、六月三十日の夜のことだ。

谷ひとつ向こうの、水岡鉦山から、おつそろしいサイレンの音が、なりひびき、あつというまに、この村も、戦争みたいなの、さわぎになつた。
 鉦山で、牛や馬みたいなの、こきつかわれていた、九百人の中国人が、日本人の現場監督を、二人ころして、集団で脱走したんだ。
 「チャンコロが、にげたぞ！」
 「脱走だ、脱走だあ！」
 消防団の男たちが、村のつじを、つむじ風みたいに、はしりぬけると、
 ——ぐわん、がん、ががん！
 と、くるつたみたいに、半鐘が、わめきたてた。村の、あちこちでは、あかあかと、かがり火が、たかれ、まっさおになつた、年よりや、女たちが、手に手に、ナタやら、カマを、にぎりしめて、あつまつてきた。
 「アカだ！ チャンコロが、せめてくるど……！」

④ しかし、たまげたことに、うねのあいだに、どてツと、はらばいになった男は、みつかっても、にげもかくれもせず、ぼんやり、じっさまを、ながめたまんま、口を、もぐもぐ、やっていた。

がい骨みたいに、やせこけて、からだの、あちこちから、とがった骨を、のぞかせた中国人は、よっぱと、はらがへつてゐるんだろ、りょう手で、どろんこだらけの、じゃがいもをつかむと、やすみもしないで、口のなかへ、



「だれだ、そこにいるのは！」
じっさまは、じまんの、大声を、はりあげたが、くすつとも、声がしない。
竹やりのさきで、さらっと、じゃがいもの葉を、かさわけると、こつちを、じろつと、にらんでる男のおが、すぐそこにあつた。

(くそ、あわてちゃ、なんねッ！)

じっさまは、たしかに脱走中国人だと、わかると、へそのあたりに、ぐりぐり、くそ力をいれて、男の目だまを、一つきにするつもりで、竹やりをかました。



「非国民、死んじまえ！」
「チャンコロの手さき、くそじい！」
と、わめきちらすことがあつたが、ちんともかんと、へんじがなく、夏せみばかりが、じーじーと、やかましく、なっていた。

血とうみで、よこれたきすぐちに、わんわん、はえがむらがり、じっさまはもう、半分、死にかけていたんだ。

(くそ！ おらの、じゃがいもが、なにをしかした、というんじや。まさか、じゃがいもが、人ごろしを、すめえに……！)

と、万造じっさまは、くどくど、おんなじことばかり、かんがえていた。

じっさまが、憲兵隊に、つかまつたのも、あの脱走中国人が、山狩りで、つかまつた時、じっさまから、もらった、じゃがいもを、だいじに、だいじに、かくしていたからだ。

しかし、万造じっさまは、じぶんのしたことが、わるかつたとは、どうしても、おもえなかつた。

「あいつは、きつと、百姓がったんだや。でなけりや、あんなまね、できるわけねえ。」
じっさまは、じぶんの竹やりで、ひとつきにしないで、よかつたど、おもつた。天子さまの、いのちをねらう、アカだとはかりおもつた、あの男が、かえりしなに、いもをほじくつたあとを、ていねいに、うめて行つたのを見て、じっさまは、なにやら、じーんと、しちまつたんだ……。

しかし、百姓だけがしつている、こんな気持が、憲兵に、つうじるはずは、なかつた。

⑤ おしこんでるんだ。ごりごり、ばりばり、かみくだく音や、ごくと、のどをとおりぬける音が、びつくりするくらい、でつかく、ひびいた。

星あかりのしたで、じっさまは、ながいこと、男のおを、みていた。

そして、よだれと、じゃがいものあく汁で、ねばねばになった、口もとに、しものぐるいで、じゃがいものかけらを、おしこもうとして、目をしろくろさせているのを、みてる、

「おい……なんにもしねえから、ゆつくり、くえッ！」
じっさまは、竹やりを、かましたまんま、おもわず、声をかけちまつたんだ……。

脱走中国人を、たすけた罪で、万造じっさまが、憲兵隊に、ひっぱられた、ときいても、はじめのうち、だあれも、信用しなかつた。

しかし、二、三日、すがたをみせなかつた、じっさまが、からだじゅう、血だらけになって、村の駐在のひっぱる、リヤカーにのせられて、かえつてくると、あのうわさは、ほんどだつた、ということになって、じっさまの小屋に、よりつくやつは、いなくなつた。

かおは、くさりかけたトマトみたいに、ぶわぶわと、ふくれあがり、からだの、うらもおもても、血とあざで、まっくろけになつた、じっさまは、ひとりぼっちの、小屋のなかで、うんうん、うなるばかりだつた。

時おり、村のあくたれわらしどもが、じっさまの小屋まで、わざわざ、やつてきて、

「たしかに、宮城のほうに、むいてたんだと……」

「おおかた、天皇陛下ばんざいでも、やらかしたんだべ。ばんざいじっさまらしい、さいごでねえか！」

と、村のもんは、半分、ばかにしながら、がやがや、わやわや、うわさした、が、じっさまの、あんぐりあけた口が、なにをいおうとしたのか、だあれも、しらなかつたし、しろうとも、しなかつた。



みにじってやるうと、かんがえるものです。ぼくらだって、中国やアジアの人びとを、人間以下のへくすのようにおもひこみ、たとえば、中国人を「チャンコロ」とよんで、たいそうばかにしました。その国に戦争をしかけておいて、「犬っコロ」のようにさげすむのは、人間として絶対ゆるせないことですが、ぼくら子どもまで、こんな気持ちでしたから、平気であのようにまちがった戦争ができたのでしよう。

こういう時代に、「弱い者の味方」をするのは、とても勇気のいることでした。そんなことをしたら最後、「アカ」へ「非国民」へ「国賊」とのしられて、人間あつかいされなくなつてからです。そのころ、戦争ばかりをする世の中をかえて、ほんとうに平和な人間らしい社会をつくらうと努力した人びとは、「アカ」とよばれていました。戦争がはげしくなるにつれ、少しでも平和を求め、人間らしく生きようとする人は、どんな人でもたちまち「アカ」にされて、社会の外へ放り出されてしまふようになったのです。

こういう体験をもつたぼくには、戦争は、決して遠くにあるものではありません。どういう形であれ、「弱い者のいじめ」がはじまったら、りっぱな「戦争」です。老人や子どもがまっさきにやられる「公害」や「交通地獄」も、勉強のできる子はばかりがえはる「受験戦争」も、ぼくにじつは、にくむべき「戦争」なのです。

そして、今度こそ、こういう戦争をたたきのめす、ほんとうの勇気を持ちたいとねがって、『ばんざいじっさま』というものがたりをかいたのです。

(さねとう あきら)

さねとうあきら「ばんざいじっさま」(『にんげん 中学生(12訂版)』(1981年発行)所収)

⑥

「あのいもは、ぬすまれたんでねえですが。くれてやったんで……」

と、いうたんびに、憲兵のびんたが、うなりをあげ、じっさまのからだは、床のうえに、はじきとばされた!

「やつは、アカなんかでねッ! ただの、百姓ががす。」

じっさまは、まげずに、声をはりあげたが、今度という今度は、口がきけなくなるまで、ぶんなぐられた!

(ちきしよう、じゃがいも一つのために……)

きすのいたみよりも、へこたれるまで、なぐられなくやささで、じっさまは、ぼてぼて、なみだをながした。

じっさまは、こんなくやしさを、かなしさを、つらさを、だれかに、きいてもらいたくて、きすだらけの、からだで、ひとりぼっちの小屋のなかを、いも虫みたいに、ころげまわった。

「おら、非国民でねッ! あのシナ人だつて、アカなんかでねッ! おらも、あいつも、百姓なんだあ!」ってだれかにむかって、力のかぎり、さげびたかつた!

日本が、戦争に負けてから、しばらくたつて、駐在が、万造じっさまの小屋に、行ってみると、たまげたことに、じっさまは、へやのまんまに、仁王だちになって、りょう手をあげたまんま、おッ死んでた。

⑦

ばんざいじっさまと私

ぼくは、戦争をにくみます。

今から三十年ほど前に、ぼくもひとりの少年として、太平洋戦争を体験しましたが、そのとき、戦争つて弱い者いじめなんだな、という実感を、しみじみ、あじわつたからです。

そのころのぼくたちは、日本が世界一正しく強い国だと教えられ、そう信じていました。ですから、中国をはじめ、アジアの国々のような「弱い国」は、なんでも日本のいいつけにしたがうべきで、少しでもさかたらたら、そこにおしかけて行って、人をころそうが、町をやこうが、大事な資源をうばいとうが、何をやっててもかまわない、とかんがえていました。

もちろん、日本人の中にも、「強い者」と「弱い者」の区別が、はっきりとありました。ぼくら子どもたちの間でも、腕力が強くて、平気で人をなぐったり、ばかにできるようなやつが、「強くて正しい子」で、ぼくみたいに、かけっこもじりなら、けんかをやつてもいっつも泣かされてるような子は、「へいくじなしの役たらず」にされてしまいました。ばんざいじっさまのよう、やさしい気持や、おもいやりの心を、うっかりもとうものなら、どれだけ苦しみ、いじめられたかわからない、おそろしい時代でした。

強い者が正しい、ということになると、少しでも、自分より弱い者を見つけて、それをぶ

いきなり、文学作品の教材文など載せたものだから、国語の授業記録でも書くのかと思われたかもしれない。このあとを読んでいただければ、それは国語のようでもあり、道徳のようでもあり、なんともけったいな「授業記録」になっている。少しばかり、事前解説をしておいた方がいいだろう。

先のトラブルは、学級集団の「ヤミ」の問題と深く関わっている。そこにメスを入れようとして、一方の当事者とトラブってしまった。結果として、以後「ヤミ」に切り込むことなく、“表面的な”「なかまづくり」に終始することになる。――私個人の心理的負担を思えば、なんともなくまとまっている状態のクラスで終えることも考えた。それで十分じゃないかとも思った。――しかし、深い部分、おそらく深層心理の部分で、現状に飽き足りない飢えた私があった。

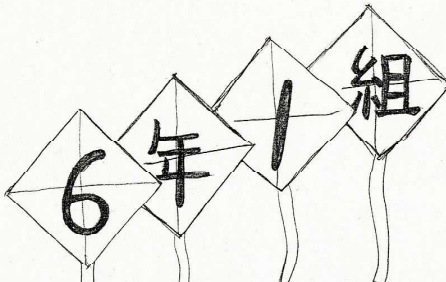
卒業の直前、再び「ヤミ」に挑む決意を固めた。ナマの問題で云々する時期ではなかったのだから、切り込む材料として選んだのが「ばんざいじっさま」だった。そして、子どもの内面を切開し、紡ぎ、繋ぐツールが、「日刊6の1」という通信であったという次第だ。

そんなわけだから、授業の質は問題にしない。要は、私の意図するところが子どもたちに伝わったかどうかだ。通信の全ページをそのまま紹介する。「熱伝導」を検証軸に吟味してほしい。

はじめに

日刊6の1

――最後の授業「ばんざいじっさま」と
卒業前10日間の6の1のすべて――



天理市立 [redacted] 小学校6年1組
1986.3.27. 発行

これは、ぼくたちが残すささやかな記録です。2年間の学級集団の最後の10日間の記録です。

2年間、いろんなことが、実にいろんなことがありました。ぼく自身がいくつものカベにぶちあたり、そのたびにそのカベによじ登る努力をしてきました。ずいぶん長い時間かかってしまったこともありました。でも、ぼくにとって何よりもつらいのは、カベに登らずに、まわり道をしたことです。

1冊の1枚文集さえも残さずにこのまま終わらせてしまっただけに、あまりにも申し訳ない。せめて最後の10日間を完全燃焼したい。そんな思いではじめたのが「ばんざいじっさま」の授業であり、「日刊6の1」の発行だったのです。

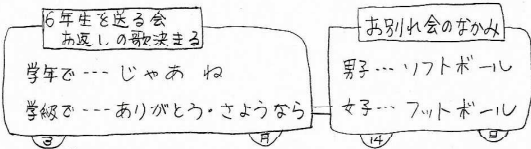
しんどかったけど、とても楽しい10日間でした。快い疲労でした。卒業前、式の準備や成績つけなどの仕事に追いまわされる時期に、こんな楽しい思いをさせてもらって幸福です。毎日、朝が来るのが待ち遠しい。熱い熱い10日間でした。

みなさんの最後の10日間よかったです。卒業という特別な事情を差し引いても、実にすばらしい歩みを残したと思います。ぼくは、この10日間(もちろん、そこにいた日々歩みがあった10日間だけ)があったことをもって、このクラスの卒業生を「れんだこなかま」の名で呼みたいと思います。 (草尾)

卒業まであと10日!!

はやいものですね。あと10日で卒業ですね。6年間、1453日の小学校生活も残るところ10日となりました。

考えてみると、やり残してきたことや、言っておきたいことが一杯あって、こりゃいかん思いまして、日刊新聞を発行することにしました。あわただしく過ぎていくこれからの10日間のスケジュールの告知せや、あわただしゆえに語りきれない思いを書こうと思います。それから、ぼくが最後の授業に選んだ『ばんざいじっさま』の授業記録ものをさせていただきます。まあ、とにかく10日間よろしく。



特報 これはまだ内緒の話なので、大きな声では言えないのだけど、-----。

実は、みんなで作ったビデオ『ヒミツのえびきこえますか』のことが、本になることになったのです。原稿用紙20~30枚ほどの記事で、夏ごろ発行の予定です。出版されたら知らせますので、あたくしみに。

日刊6の1・創刊号2

ねがため、わざわざとうげを2つ3つこえて停車場までいき、みんなの心の不安をとりけすためにも、自分の気づらしのためにも、こんなにもいっしょうけんめいになってばんざいをしていこうと思う。自分の身内をなくしてかなしくないはずがない。それをうばった天皇や戦争をうらまないはずがないと思う。でも、もしかしら、じっさまは天皇をうらまらずに敵の兵士をうらんでいいるのかもしれない。天皇にじゃがいもをつくらせているのは、相手をやっつけ、おすこのかたきをとってくだざいと言っているようなものかもしれないと思う。(西田)

◎ 加藤さんのとぼろっと感じかたがっている。どちらが正しいかじゃなくて、じっさまへの考えを深める参考にしてほしい。

☑ じっさまはどうして戦争なんかに関与する人だろう。くやしくないのかなあ。おすこを全部殺されてくやしくないのかなあ。戦争でおすこを殺されてまだお国のためになりたいなんて、よく思うわと思う。それに戦争になると、みんなこころになるなんていやだと思う。反対したいけどできない。けいども、「戦争から逃げて帰ってきてくれたら」と思うのかどこがいけないだろう。おくにのためだからって、人が死んでも、人を殺しておなんて、いやだと思う。---(中谷)

☑ ぼくはこんな時代がいいやです。戦争もあり、たてまは「あ

『ばんざいじっさま』より

最初の場面で、じっさまや村人に対する感想を書いてもらった中で、学校ことが多かったあの、考えさせられることが多かったものを紹介します。自分の考えを深める参考にして下さい。

☑ -----じっさまは、元氣でもないでひとりしょんぼりくらししているから、ぼくは、ひとりでもいいからおすこかえってきてほしいと思う。(佐保野)

◎ 「一人でもいいから帰ってきてほしい」と書く佐保野君のやさしさがたまらない。

☑ -----じっさまも、人を殺してしまふなんて、なんのために生まれた人かわからへんやんかと思いました。(西田)

☑ じっさまは、なぜ自分の子どもが3人も戦死しているのに、戦争を起こした人にはらがたないのかな。なんのよよく考えてみると、じゃがいもの番も、ばんざいも、死んだ子どもに対してじっさまがしてあげられるゆいづのことだと思う。だから、自分の子どもがぐせいになったのだから、絶対勝ってもらわなければと思ってやっていると思う。(加藤)

◎ じっさまのしていること、考えていることがようわからんと言っていた多くの人たちに、参考にしてほしい感想です。

☑ じっさまは、ひとりぼっちでさびしい思いをばんざいにかくしているんじゃないかなあと思う。ばんざいをして、悲しみをあさるこんでいるんだと思う。たくさんのおすこでさびしさをまぎら

国のためよなのは、本ねが言えない村人たちが万進じっさまにパンゲイをやってもらうのは、お国のためではなく、おすこたちがどってくるような気がおすこからです。しかし、お国のためと言われていた時代、本ねが言えないのは、かなしいことだと思います。(中谷)

あすの予定

- 1 よびかけと歌のふんしゅう
 - 2 } ばんざいじっさま
 - 3 }
 - 4 音楽
 - 5 } 昇降口におくさん板づくりをする。(卒業前の準仕作業)
- 放課後
- ◎ 雨の日の昇降口、少しはましになるでしょう。
 - ◎ 金ガチを持って来て下さい。

日記

またあした---